

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財) 第五福竜丸平和協会  
連絡所 〒136-0081 東京都江東区 夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内 電話 03-3521-8494



4月6日のお花見平和のつどい 2002・展示館前広場

## 憲法を、平和を守りましょう

和田正江

四月六日に夢の島の第五福竜丸エンジン前の広場で「お花見平和のつどい・2002」が開かれました。戦争を経験している私達の年代から若い高校生まで、思い思いに平和を語り合い平和への思いを新たにしました。しかし、この一瞬にも地球上で殺戮が行われ何の罪もない子供が犠牲になっています。

昨年九月のニューヨークの同時多発テロ、このような一般市民をまさきこむ無茶なテロは決して許すことはできません。しかし武力で報復して、報復の連鎖をたちきることができません。

日本は、米軍などの軍事行動に対する自衛隊の支援につながる「テロ対策特別措置法など関連三法」が成立し、さらに有事法制の法案国会提出が大詰めを迎えようとしています。法案は有事の際に私たち国民の権利を制限する内容を含んでいます。世界がきな臭くなっている今日、第二次大戦の犠牲によって得た平和憲法を守り「戦争はやめよう」と言い続けましょう。

私の兄は昭和一九年に、マーシャル諸島のクワエゼリン島で玉砕・戦死しました。大学を卒業してすぐ入隊して将来の夢を断られた兄の無念さもさることながら、我が子の死を嘆き悲しむことが許されなかつた母の心境を思うと胸がしめつけられます。クワエゼリン島は米軍の核基地のため墓参も遺骨の収集も思うようにできません。私は夢の島に行く度に、第五福竜丸の船体に手を当ててマーシャルの海を偲び、核兵器のない世界を祈ります。

また、私は空襲で爆弾が家を直撃し、家は崩壊焼失、九死に一生を得ました。ご近所で亡くなられた方があります。戦争とはこのように普通に暮している人々が、家を焼かれ、命を絶たれ、最愛の家族を失うことです。どんな理由があっても戦争はいやです。戦争をすることはダメです。私たちは平和に慣れてしまっていますが、平和は座して与えられるものではありません。

「平和のつどい」を機に「平和を守る」決意を新たに心に誓いました。(わた まさえ・主婦連合会会長)

## お花見平和のつどい開く

第五福竜丸のエンジンを東京・夢の島への運動を担った市民団体を中心に発足した「第五福竜丸から平和を発信する連絡会」の主催による「お花見平和のつどい・2002」が、四月六日、第五福竜丸展示館にて開かれ、一六〇名余りが参加しました。

心地よい春の陽射しのもと、午前一時半、参加者は福竜丸のエンジン横につどい、東京地婦連の田中里子さんのあいさつにつづいて、主婦連や東友会(被爆者の



会、東京消費者団体連合会、東京都生協連、東京原水協、平和協会など連絡会参加の団体からこの一年のとりくみについての報告がおこなわれました。

今年は、春の訪れが早く、地婦連が植樹した八重紅大島桜も一日ほど前に満開となりこの日は鮮やかな緑の葉桜。それでも参加者は、新緑を楽しみながら昼食、そして若者達のストリートミュージシャンによる演奏が繰りひろげられました。

午後の部は、一か所に分かれて、展示館の中では、大石又七さんのマーシャル訪問の報告会がもたれました(2面に関連記事)。エンジンの前ステージでは、若者達による紙芝居「ぞうれっしゃ」の上演、被爆者・西野稔さんの訴え、戦災資料センターからのあいさつなどがおこなわれました。最後に全員がふたたびエンジンの前に集まり、「青い空は」を合唱し主婦連合会の和田正江さんからの閉会あいさつ、来年の再会をよび



平和のメッセージじゃもし

## 平和協会

### 第一五二回理事会開く

第五福竜丸平和協会の第一五二回理事会が三月二三日、学士会館で開かれました。

理事会は、川崎会長を議長に議事をすすめ、平成一三年度の事業現況と決算の見通し、一四年度の事業計画、予算、評議員の補充、寄附行為の改正などについて審議しました。出席は、川崎昭一郎会長、藤田秀雄副会長、小川岩雄、猿橋勝子、服部学、松井康浩、山村茂雄の各理事と沢藤統一郎監事、安田事務局員でした。

なお、協会では五月一八日に第一五三回理事会、平成一四年度第一回評議委員会を開きます。

## (2めんよりつづく)

こんなところに半世紀も閉じ込められたら、親から子、子から孫へと何が伝わるだろうか。他国の方が入り込み、住んでいる人をこのような生活に追いやっていいのだろうか。

私をひとりの老人が訪ねてきました。ジェン・カブレさん、六十九歳。老人ではなかった、私と同じ年でした。

ジェンさんの言葉からくやしさが伝わって、私の胸に重いものを残しました。「ピキニはマーシャルで一番美しく、魚も食べ物も豊富な神がくれた島だ」と、ジェンさんは本当にピキニを愛しているのです。その島はいまだに毒の島と化しています。彼自身も甲状腺、胃、心臓を患ってきました。そして最後に六人の子どもすべて死んだと聞いたときには返す言葉がありませんでした。

ジェンさんはお土産にといって美しい貝をくれました。私のことを思い出してくれと頼みました。私は「大切に」と答え、いまこの貝は店のテレビ台から、いつも私を見ています。(以下次号)

# 被ばく者として マーシャルを 訪ねて 大石又七

元第五福竜丸乗組員の大石さんは、二月二六日から三月一三日まで初めてマーシャル諸島を訪問。現在、報告集を執筆中ですが今号ではその一部を掲載します。  
(文責編集部)

## 三月一日、太陽が昇る

マーシャルの首府マジュロについて二日目、三月一日を迎えます。

私は夜明け前のマジュロの海岸に出て、ビキニ水爆の爆発時間である三時四五分を待ちました。そしてビキニ島に向かって水平線をしばらく眺めていました。一生懸命になって働いている仲間たちの顔、姿などが浮かんでき

て、当時の状況を思い重ねあわせました。すでに半分がこの世の人ではありません。「俺たちにとって『ビキニ事件』とは一体なんだったのか」。じっと見つめていましたが、水平線は何もこたえてくれません。

この日の昼からは、核被害者デー記念式典でした。マーシャル共和国のケッサイ・ノート大統領、閣僚、アメリカのマイク・セシコー大使、日本の林大使も出席し、三〇〇人ほどはいたでしょう。

私は三番目に発言しました。

「私はあの巨大な水爆実験で被ばくした日本の漁師です。『死の灰』に襲われ私たち三三人の人生



発言する大石さん

も大きく変えられてしまいました。……死んでいった一人の仲間と同じように私も肝臓ガンにかかり手術をしています。

……ビキニやロンゲラップのみなさんが生活を奪われたまま島に帰れないことは本当にお気の毒です。生き残っている者たちも、見えない放射線が体に染み込み、いつ発病するか、今もって脅かされています。被ばく者の本当の苦しみは被ばくした者でなければ分かりません。何の罪もなく、平和に暮らしていたみなさんや私たちを死に追いやった核実験をやった国は、当然その責任を負わなければなりません……」。

## ヒロコさんに聞く

ロンゲラップ島の被ばく者、ヒロコさんに話を聞きました。彼女の名前は日本兵が付けたという。

「私は子供とココナッツ取りに行った帰りに白い粉がたくさん降ってきました。目に入り、体がかゆくなり次の日は具合が悪くなりました。七五年に甲状腺の手術をうけ母は皮膚ガンに、父は胃ガンで死にました。」

かつてクワジュリンのキャンプにいる時、『あいつらは体に毒を持っていて』と行って被ばくしていない人は家にも近寄りなかつた。今は周りの島の人達も被ばくしていると主張するようになってきました。

## 周囲四キロのキリ島

三月三と四日、ビキニ島の人達が避難し千人ほどが暮すというキリ島を訪ねました。この島の広場でもビキニの式典がありました。この島は環礁がなく四方が外海で漁もできず作物も取れず、アメリカの缶詰やインスタント食品、飲み物はコーラや甘いジュースの生活で、一日中なにもすることがなく大人も子供もぶらぶらしているように見えました。

そして、海辺には空き缶やビニールの屑の山、ネズミの群がいつせいに隠れたんです。  
(4めん下につづく)

## ゴジラと社会…岡本太郎の意志を継いで

大杉浩司

川崎市の岡本太郎美術館で企画展「ゴジラの時代」が開かれます。

この企画展には第五福竜丸平和協会所蔵の画家ベン・シャーンの素描作品六点と展示館のビキニ事件関係資料が展示されます。企画展について同美術館学芸員の大杉浩司さんに寄稿いただきました。

「岡本太郎とゴジラは何の関係があるの?」と聞かれれば「関係はないよ」と答えるばかりありません。ではなぜ岡本太郎美術館で「ゴジラの時代」展をするのかと聞かれれば「岡本太郎美術館だからです」と答えるしかないでしょう。

岡本太郎の残した著書『日本の伝統』の一節「法隆寺は焼けてけっこう、自分が法隆寺になればいい」という文章があります。岡本太郎は単に美術や造形という狭義な分野だけでなく、思想家として生きた人です。彼は伝統や文化について、生活の実態と離れた特別なものであってはならない。常に我々の日々の生活から生み出されるものだとこのことを生涯を通じて問い続けてきました。法隆寺は焼けても、今ここにいる私たちがそれ以上の文化を生み出すことが岡本太郎の主張する伝統論であり文化論なのです。さて、ゴジラについてですが、

ここでとやかく説明しなくても読者の方はよくご存知だと思えます。今でこそゴジラは、お正月映画のヒーローであり、日本だけでなく世界の人達に親しまれているキャラクターです。しかしゴジラが誕生する一九五四年という時代は日本が経済的な自立を始めた時代であり、そのきっかけは一九五四年にビキニ環礁の水爆実験によって被爆した第五福竜丸の事件だったのです。

原水爆についていえば岡本太郎は、「きのご雲も見なかったし、火傷もしなかった、そして現在、生活をたくましくうち出し、新しい日本の現実を作りあげる情熱と力をもった日本人、その生きる意志の中にこそ、あの瞬間が爆発しつづけなければならぬのだ。」

岡本太郎『私の現代芸術』と云います。この一節借りても、法隆寺同様に戦争や原水爆の問題も過去に起こった悲劇として現実の社会から切り離し恭しく神棚に祭るのでなく、その現実を直視して今の瞬間にも我々が次の行動をとらなければならぬといっているのです。

川崎市・岡本太郎美術館

## ゴジラの時代

4月20日-7月28日

出品作品/資料…ゴジラぬいぐるみ、映画ポスター、映画上演、岡本太郎「燃える人」油彩、ベンシャーン素描6点ビキニ事件、福竜丸被ばく写真、死の灰、ほか  
問い合わせ電話044-900-9898  
交通-小田急線向ヶ丘遊園駅南口より徒歩17分、車4分

岡本太郎美術館 学芸員



映画ゴジラ第一作、銀座を破壊するシーン(一九五四年一月三日公開)写真 © 東宝